

2018 年度 小委員会活動成果報告

(2019 年 2 月 14 日作成)

小委員会名	バイオクライマティックデザイン小委員会	主 査 名：斉藤 雅也 就任年月：2015 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (熱環境運営委員会)	委員長名：岩田 利枝 主 査 名：尾崎 明仁
設 置 期 間	2015 年 4 月 ～ 2019 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<ul style="list-style-type: none"> ・持続可能な都市・建築の実現に寄与するパッシブ技術のデータベース化 ・住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境システムの評価手法の構築 ・地域気候に適した自然環境ポテンシャルの有効な活用策の検討 	
委員構成 (委員名(所属))	委員公募の有無：有	
	主査：斉藤 雅也 (札幌市立大学) 幹事：高田 真人 (熊本大学) 委員：宇野 朋子 (武庫川女子大学), 金子 尚志 (滋賀県立大学), 菊田 弘輝 (北海道大学), 北瀬 幹哉 (環デザイン舎), 源城 かほり (長崎大学), 小玉 祐一郎 (エステック計画研究所), 宿谷 昌則 (東京都市大学), 菅原 正則 (宮城教育大学), 須永 修通 (首都大学東京), 築山 祐子 (旭化成ホームズ), 畑中久美子 (岐阜市立女子短期大学), 長谷川兼一 (秋田県立大学), 廣谷 純子 (みつデザイン研究所) (50 音順 敬称略)	
設置 WG (WG 名：目的)	環境適応モデル WG (委員 15 名)：温熱快適性の適応モデルは、人体-環境間の熱移動モデルに対し、環境実測に基づく実態調査を主体とする。これまで世界各地で実態調査、データベース化が進められ、温熱指標と比較することで、中立温度の季節変動、受容範囲の拡張などの新たな知見が得られてきた。しかし日本では、適応モデルに関する議論、調査データの蓄積は十分に行なわれてこなかった。そこで文献調査や実測調査によりデータを蓄積し、また議論を行い、寒暖・乾湿差がある日本の各地域に適用可能な適応モデルを提案する。	
2018 年度予算	160,000 円	ホームページ公開の有無：有 委員会 HP アドレス： http://news-sv.aij.or.jp/kankyos14/

項 目	自己評価
委員会開催数	4 回 (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	1. なし
講習会	1. なし
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会承認企画	1. なし
大会研究集会	1. なし
対外的意見表明・パブリックコメント等	1. なし
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	1. 2018 年大会 (東北) では、本小委員会主催で OS (OS：設計教育×建築環境学, OS：適応と環境デザイン) を開催。2 つの OS とも 30~40 名ほどの参加者の参加があり、盛会となった。 2. 小委員会を 4 回開催 (1 回は環境適応モデル WG として開催、1 回は予定) した。 3. 大会投稿時の細分類・細々分類について話し合った。環境工学委員会内の目標を同じとする他の運営委員会 (環境設計運営委員会) との連携を図る予定。
委員会活動の問題点・課題	1. 本小委員会では、2019 年度に主催を予定している熱シンポジウムに向けて準備を進めるとともに、2011 年に本委員会で作成した「設計のための建築環境学」(彰国社) の改訂版出版を 2019 年度内に予定している。 2. 主査・幹事をはじめ全国各地に委員が散らばっているため、通年の小委員会の配分予算の範囲内では委員旅費を工面するのが困難であった。今年度、

	<p>Skype を用いたインターネット会議及びメール会議を実施し、会議への適用を図ってみた。来年度も積極的に導入していきたい。</p> <p>3. 熱シンポジウムや大会 OS (オーガナイズドセッション) 等の企画にあたり、可能ならば、該当年度においては小委員会の予算配分を幾分か割増し頂く措置を検討して頂きたい (上記 2.の事情があるため)。</p>
--	--

環境工学委員会用 自己評価欄

2018 年度 小委員会活動 自己評価

(最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<p>2018年度、本バイオクライマティックデザイン小委員会では、</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 持続可能な都市・建築の実現に寄与するパッシブ技術のデータベース化 2) 住まい手の環境調整行動を考慮した建築環境システムの評価手法の構築 3) 地域気候に適した自然環境ポテンシャルの有効な活用策の検討。 <p>について活動した。計 4 回の小委員会では、傘下の環境適応ワーキンググループと共催で実施した。毎回、委員のそれぞれが話題提供を行い、事例や研究データを蓄積した。</p> <p>主な活動成果は、①上記の1)～3)の活動を通して、論文投稿時の細分類・細々分類について検討を行ない、小委員会として取りまとめたこと。②環境工学の分野内での横断連携による発展を見据え、2018年大会(東北)では、本小委員会主催でオーガナイズドセッションを2つ(A.設計教育×建築環境学、B.適応と環境デザイン)を開催し、それぞれ多数の参加があったことである。特にA.では、建築意匠系の大学院生が登壇し情報交換ができたこと、B.では今後、熱環境履歴と熱環境適応のさらなる解明が必要であることが確認され、それぞれ有意義な討論の場となった。今後は上記OSをきっかけに、他の運営委員会(環境設計運営委員会など)との連携をとる予定である。また、今年度より「熱環境適応WG」が立ち上げられ、熱環境適応に関する勉強会を開催し、活動範囲の拡大に努めた。</p> <p>2019年度には、本小委員会の担当で「熱シンポジウム(会場予定:信州大学)」の開催を控えている。また熱シンポジウム開催に併せて、2011年に本小委員会編集・出版した「設計のための建築環境学」(彰国社)の改訂版の出版を2019年に見込んでいる。そのための準備を本年度より開始している。</p>			

- 総合評価は4段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価: 小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価: 小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価: 小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価: 小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価(シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など)に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。